

(ラジオドラマ)

メケメケがくれたチョコレート

作 佐藤良士

人物

明子(メケメケ)

さぶ(さぶちゃん)

洪太

少年たち

現在の大阪の町

自動車の音、騒音、現在の歌(例えば宇多田ひかる)

突然、静寂

あの頃の大阪の町

あの頃の歌(例えば坂本九の「上を向いて歩こう」)

人々の熱狂の気配、街頭のザワメキ。

「力動山の空手チャップが炸裂、リンクを逃げるシャープ兄弟！」

「皇太子殿下と美智子さまを乗せた馬車は、今、東宮御所の門を出発しました」

「長島打った、大きい、大きい、入った、入った!。長島、天覧さよならホームラン！」

洪太(N) メケメケがやってきたのは、たぶん長い夏休みが始まった頃だった。一人でやってきたメケメケは、さぶちゃんのおばあちゃんの家で暮らし始めた。そこはさぶちゃんの家隣の隣だが、同じ敷地の中だったから、メケメケはさぶちゃんの家に行ってきたといつてもよかつたのである。

僕の家の中には大きなハラッパがあつたが、その頃にはハラッパの半分が無くなって、小さな家と小さな道が幾つも出来た。僕たちは迷路のような小さな道を通って、生き残ったハラッパに遊びに行った。僕たちの遊びはビー玉や、缶蹴り、ベッタン(メンコ)、それから何より熱中したのは三角ベースの野球だった。

その大きなハラッパは、元は全部さぶちゃんのおばあちゃんのもので、だから、さぶちゃんのおばあちゃんは、このあたりで一番のお金持ちだということは、いつも、サブちゃんの家でテレビを

見せてもらう僕たちにも、十分に理解できる話だった。
メケメケは僕たちより一つ年が上だったから、確か小学校の六年生だったが、大柄でおとなびた女の子のメケメケは中学生のように見えた。サブちゃんの家で、月光仮面を見るときは、いつもメケメケが正面の席を占領するのだった。

「月光仮面」の曲が流れる。

何処の誰かは 知らないけれど

誰もが みんな 知っている

月光仮面の おじさんは

正義の味方よ、いい人よ

疾風のように 現れて、

疾風のように 去っていく

月光仮面は 誰でしょう

月光仮面は 誰でしょう

ハラッパ。草野球をする少年達。歓声。打球音。

少年A さぶちゃんの番や。ニアウトやからな。

明子 サブちゃん、ホームラン打って。

少年B あれ、誰や。

少年C 知らん、さぶ、三振するなよ。バットを短く持って当てるんや。

明子 いいよ。そんなこと。さぶちゃん、思い切り振るのよ。三振なんか気にしないで、思い切り振るのよ。

少年A 何か言ってるな。誰かの姉ちゃんか。

少年B さぶちゃんはバットを振り回してるだけやからな。全然ボールを見てないねん、思い切り振ったりしたってあかんねん。

明子 あんたら、長島を知らんの。長島は三振したって、空振りしたって、いつも思い切りバットを振ってるやない。

少年 長島を知らんわけないやろ。

少年A さぶちゃんが、長島になれるかいな。

明子 次のボールよ。長島みたいに思い切り振って!。

少年B あーあ、やっぱり三振や。

効果音!

再び、原っぱで遊ぶ少年たちのさわめき。

さわめきが遠退いて。

明子 さぶちゃん、こんなとこで何してんの。

さぶ ビー玉やんか。ビー玉知らんのか。

明子 二人でやってて面白いか。

さぶ 洪ちゃんは何たやからな。練習してんねや。みんなとやった時、取られてばかりやからな。教えたってん。

明子 あんた、洪ちゃん言うのん。おばあちゃんのいうてた裏のお父さんの居てへん子てあんた？

さぶ そうや、そやけど洪ちゃんにはお母さんがいてる。明ちゃんとは違つ。

明子 洪ちゃん、それ貸してみ。私が見本見せたるわ。

洪太 なんや、それ「めっかち」やんか。俺ら、そんなん、せえへんで。なあ、さぶちゃん、「めっかち」なんかで勝負したって面白ないもんな。

明子 それやったら何してんの。

さぶ 「ナキ」や。「めっかち」なんか女のやることや。

明子 「ナキ」かいな。見ててみ。私、「ナキ」かて知ってるわ。

原っぱの向こうから、明子を呼ぶ声。

洪太 あ、おばあちゃんが来た。明ちゃんを呼んでるんちゃうか。

さぶ おばあちゃんが用事やいつてるで。明ちゃん、はよ帰らんとおばあちゃんに怒られるて。

明子 なんや、ええとこやのに。うちだけなんでいつも用事せんなんの。さぶちゃんにはなんで何にも言えへんの。

さぶ 女やからやろ。女はつらいなあ。

効果音！。

セミの声。氷屋の音。はったい粉売りの声。

「麦茶、はったい粉！」。

ベッタンの音

ベッタンの音

明子 それ、ベッタンやろ。

さぶ あれ、おばあちゃんの用事、終わったんか。

明子 うん、もうええね。お昼ごはんも食べたしな。

洪太 さぶちゃんの番や、この月光仮面、とれるんちゃうか。

ベッタンの音

さぶ よし、これで取り返したで。

明子 私のこと「メケメケ」ていつたの、さぶちゃん？。

さぶ 違う。洪ちゃんや。

明子 洪ちゃんやの。なんで私が「メケメケ」やの。

洪太 そやかて、蛇、怖がれへんやんか。

明子 蛇？

洪太 ほら、昨日お寺に、いちじく取りに行った時に、蛇がおったやんか。

さぶ いちじくの下の叢や。

洪太 そうや、叢や。明ちゃん手で蛇つかんで投げたやろ。

さぶ みんなびつくりして、泣いてる子もおったな。

明子 あほらし。蛇なんかうちの家の周りにいくらでもおったわ。

洪太 そやから、メケメケや。

明子 メケメケて何やの。

さぶ メケメケて「少年ケニヤ」に出てくるんや。

洪太 そうや。ほんとはな白人の女の子で「ケート」いうんやけどな。日本人のワタルと一緒にマサイの部落にやってくるんや。

明子 「少年ケニヤ」て、さぶちゃんの部屋の本棚にあったな。

さぶ 明ちゃん、何で知ってるんや。

明子 何でもええやんか。それよか、はよ言うてえな。何でうちがメケメケやの。

洪太 マサイの酋長のゼガがケートのことをメケメケていうんや。

ケートは、大蛇ダーナに守られてるさかいな。

さぶ 大蛇ダーナは、マサイの村が白人に襲われたとき、ケートが祈ると、底なし沼の向こうからケートや、ワタルや、マサイの村を助けにくるんや。

明子 メケメケて変な名前やな。

洪太 メケメケというのはな、蛇の神様のおつかいなんや。

明子 蛇の神様のおつかい？、私は蛇の神様のおつかいなんか。

さぶ 明ちゃんと違う。ケートやんか。蛇の神様なんか居てへんかな。

明子 蛇の神様やつたら、うちの田舎にもあつたで。

洪太 え、明ちゃんの田舎でどこや。

明子 うちの田舎は奈良や。三輪山いう山があつてな。うち見たことある。

さぶ 何おや。

明子 絵や、神社で見たんや。三輪山をな、大きな蛇がぐるぐる巻いてた。そやから蛇が三輪山の神さんなんや。

洪太 ふーん。もしかしたら、明ちゃんは、ケートみたいにその蛇の神さんの使いなんかかもしれへんな。

効果音！

ベッタンの音。

明子 そんなこと誰にも言ったらあかんで。私が蛇の神さんの使いなんて言うたら、承知せえへんよ。

洪太 言えへんやん。冗談や。なあ、さぶちゃん。

明子 おばあちゃんにはな、絶対内緒やで。

せみの声。

しばらくして遠ざかって、やがて雨の音。しばらくして雷。雷がやんで。

洪太（N） メケメケは近所の女の子とは遊ばないで、いつも僕やさぶちゃんの仲間と遊んでいた。まだこの学校には行ってなかったから友達がいなかったのだろうが、なんとなく僕たちにはメケメケは他の女の子とは違う「特別な子」のように思えた。僕たちと遊んでいると、すぐにさぶちゃんのおばあちゃんがメケメケを呼びにきた。おばあちゃんは、女の子は男の子と違って、家の仕事を手伝わないといけないと言った。でも、他の女の子は家の仕事を手伝っていない。それに、おばあちゃんはメケメケのことを親戚の子だといったが、近所の人は、本当はさぶちゃんのお姉さんだと噂した。さぶちゃんのお姉さんなら、どうしてメケメケだけおばあちゃんの家にいるのだろう。どうしてさぶちゃんは遊んでいるのにメケメケだけ家の仕事を手伝わないといけないのだろう。だから、お祭りの夜も、近所の子はみんなきていたけど、メケメケだけは姿を見せなかった。

夏祭り。太鼓の音。子供たちの歓声、大人たちのざわめき。

夜。神社の境内のお囃子の音。香具師の呼び声。

少年A 亀ちゃん、「抜き飴」出来たんか。

少年B 出来たで。

少年C おまけ、何やった。

少年B 「鉄人28号」のべったんや。

少年A なんや、しょうむないな。

少年C 抜き飴よか、「当てもん」のほづがええんとちゃんか。

少年A 亀ちゃん、当てもんもやったんか。一等は百連発やろ。

少年B あんなんあたるかいな。スカばっかりや。

少年C 亀ちゃんとお父さん、おみこし引いたはったな。
少年A あれはおみこし違うで、だんじり言うんや。
少年B そうや、うちは毎年お父ちゃんもお兄ちゃんもお祭りに出るんや。そやから俺も中学生になったらお祭りに出るんや。
少年A あ、花火やってるわ。
少年C 花火や、川のほうでやってるんや。見に行くか。
少年B ええわ、今度お父さんが天神祭り見につれてくれる。
少年A ほんまか、天神祭り、もうすぐやな。
少年C 俺、天神祭り見たことない。
少年A 俺もや。亀ちゃんはええな。いっぺん天神祭りの獅子舞みしてみたいな。

天神祭り。お召し太鼓。獅子舞のお囃子。掛け声。花火。
船渡御の賑わい。それぞれの船の笛、太鼓、鐘の音。
やがて祭りの賑わいは遠ざかって。

下駄の音、呼び鈴。

玄関に人の気配。さぶの家である。

明子 だれ！
洪太 さぶちゃん。居ますか？

玄関の開く音。

明子 なんや。洪ちゃんかいな。どないしたん。
洪太 明ちゃん。何してんねん。
明子 留守番や。今、誰も居てへん。みんな天神祭りに行ってるからな。
洪太 さぶちゃんもか。
明子 そうや、誰も居てへんて言つたやろ。
洪太 おばあちゃんは？
明子 おばあちゃんは隣の家でもう寝たはるわ。

静寂。表を通る自転車の音。遠ざかって。

明子 そこ、締めて、こっち入り。
洪太 ええんか。
明子 いいわよ。私の家やもん。
洪太 そやかて、みんな天神祭りに行ってるんやろ。明ちゃんは行けへんのか。

明子 私は連れてもらえへん。それより、あんた何しに来たの。
洪太 明日でもええんや。「少年ケニヤ」借りにきただけやから。
明子 洪ちゃんは、「少年ケニヤ」持ってへんの。
洪太 ウン。全部さぶちゃんところにあるからな。
明子 そうなの。それやったら、さぶちゃんの部屋やからすぐわかるわ。私が一緒に行つたげるから入って、持って行き。
洪太 明日にするわ。さぶちゃん居てへんかったら悪いやんか。
明子 ええから、私の言つとおりにし。さぶちゃんには、私が言う
といたるさかい。

玄関の閉まる音。足音。

洪太 暗いなあ。

明子 さぶちゃんところ、来たことあるんやろ。

洪太 うん、前に何回か来た。

明子 それやったら、自分で捜して持つて行つたらええわ。

洪太 なんか、今日の明ちゃん違つみたいやな。

明子 何が？

洪太 口紅してる。

明子 。

洪太 それに、何か大人みたいや。

明子 洪ちゃん、誰にも言つたらあかんで。

洪太 口紅してるんが。

明子 そや、うち、始めて口紅したんや。うちが口紅したこと誰にも内緒やで。言つたら承知せえへんで。

洪太 。

明子 はよ、部屋に入り。

扉の開閉音。

洪太 電気つけてええか。

明子 あかん。お月さんの明かりでちゃんと見えるやろ。

洪太が本を開いている様子。暫くして。

洪太 これにするわ。今日はこれだけにしとく。

明子 ほんとはな。あんた、うちのこと蛇の神様のおつかいやてい
うたやろ、あれかてほんとは怒ってるんや。

洪太 あれは冗談やんか。

明子 洪ちゃん、知ってるか、神さんのお使いは巫女いうんやで。

うち、巫女さん見たことある。

洪太 巫女さんやつたら、俺も神社で見たことあるで。

明子 洪ちゃん、怖いんか。

洪太 怖ない、怖い事なんか無いで。この部屋何べんも来てるからな。

明子 違う。うちが怖いんか。

洪太 明ちゃんがか？

明子 うちがメケメケやで。うちは蛇女なんや。そやからなこの家のもん、みんなうちのもんにしたるねん。

洪太 何でそんなこと言うねん。

明子 あんたは何にもわからへん。まだ小さいから何にもわからへん。

洪太 わからへんて、明ちゃんのことか。

明子 うちが本当はな、ここのお父さんの娘なんや。そやけど、うちのお母さんは日陰もんやからな、さぶちゃんとは違うねん。そやけど、うちはこの家の娘や。そやからな、この家のもん、みんなうちのもんにしたるねん。

ナニの声。

洪太（N） その年の高校野球の大阪代表は、PL高校が初出場した。PLは甲子園で快進撃を続けた。甲子園のアルプススタンドで繰り上げられるPLの人文字の応援風景は、夏の高校野球の評判になった。そのPLの出場する日に、僕たちは始めて自分たちだけで甲子園に出かけた。それは少年たちにとっての旅の始まりだった。

電車の音。 野球場の歓声。 打球音。 応援の鳴り物。

洪太 さぶちゃん、もう帰らへんか。みんな、もう帰ったで。

さぶ もうすぐやて、洪ちゃん。

洪太 そやかて、試合、みんな見てたら遅なってしまうで。

さぶ PLの人文字は、五回ぐらいにやりよるんや。今三回やろ、そやからもうあと二回や。もしかしたらナイターになるかもしれん。洪ちゃん、ナイター見たことやろ、ナイターになったら涼しいで、

洪太 みんな甲子園の駅で待ってるいうてたから、待ってるんとかやうんか。あんまり待たしたら怒りよるやろ。

さぶ 心配せんでもみんな勝手に帰るやろ。俺、お父さんと一緒に来たことあるからちゃんと知ってる。あいつらがおらんでも一緒

に帰つたら大丈夫や。あ、チェンジや。あと一回や、次の回のP
Lの攻撃だけ見たら帰るがな。

洪太 さぶちゃん、俺な不思議なんや。

さぶ 何がや。

洪太 さぶちゃんとこのお父さんてメケメケのお父さんやろ。さぶ
ちゃんとメケメケは本当は兄弟なんやろ。違うんか。

さぶ 何でそんなこと聞くねん。

洪太 そやかて、町の人みんな言つてるで。

さぶ 。

洪太 それに、こないだメケメケも言つてたんや。メケメケはさぶ
ちゃんのお父さんの子供なんやて。

さぶ そんなことない。それやったら、お母さんも一緒なんか。

洪太 メケメケのお母さんは日陰もんなんやて。日陰もんでな
んや。

さぶ 。

洪太 さぶちゃん、また点入れられたで。PLが負けてる時は人文
字の応援はやれへんのとちゃうか。

さぶ 。

洪太 メケメケが変わつてるな、こないだ俺見たんや。メケメケ口
紅つけてたで、あんな口紅どないしたんやろ。

さぶ 。

洪太 さぶちゃん、なんか暗なってきたな。ナイターになるかもし
れへんな。

さぶ 俺、帰る。

洪太 え、PLの人文字はええんか。ナイターになったら見てみた
いや。さぶちゃん、一緒に見て行こうや。

ラジオの声。「打った、大きい、大きい、打球はレフトの頭
上を越えて、レフト線にころがつています。一人、二人、三
人、続いてホームイン。PL高校、逆転！」

盆踊りの音頭。ぞわめき。

洪太(N) その年の盆踊りは、僕らの遊んでいるハラツパであつ
た。お地藏さんの横の酒屋さんが、ビルの工事をやっていたから、
酒屋さんの前の道が使えなかったのだ。

盆踊りの日は、小さな子供と大人たちはみんなゆかたを着ていた
が、僕たちぐらいの年の子は、何人かの女の子を除いて、ゆかた
を着ている子はいなかった。けれども驚いたことにその何人かの
ゆかたの女の子の中にメケメケも入っていた。僕たちには、ゆか

たを着て楽しそうに踊っているメケメケは、まるで大人の女の人のように見えた。

盆踊りの音頭が大きくなって、やがて遠ざかる。

洪太（N） そんなメケメケが、盆踊りにあきて空き地の暗がりでは、花火をやっていたばくとさぶちゃんのところに行ってきたのは、盆踊りも終りに近くなった頃だ。

明子 何や、花火か。うちにもやらして。

さぶ 明ちゃん、もう踊れへんのか。

明子 うん、もうあきた。おばあちゃんも帰ったしな。

洪太 明ちゃん、踊るのうまいなあ。

明子 お母さんに、教えてもろたからな。

さぶ え、お母さんて僕とこのお母さんか。

明子 せんこう花火で、なんや流れ星みたいやな。

洪太 流れ星は、こんなにたくさん火花出せへんで。

明子 うちとこの田舎やったら、一晚にいくつも流れ星が落ちる時もあるんやで。

洪太 明ちゃんとこの田舎で、奈良やったな。

さぶ 流れ星は何処に落ちるんや。

明子 お墓や。

さぶ お墓？

洪太 明ちゃんとこの田舎で、お墓があるんか。

明子 そや。三輪山の近くにな。大きな、山みたいなお墓があるんや。私の家の窓から見ると幾つも幾つも流れ星がそのお墓の向こうに落ちるのが見えるねん。

洪太 そんな大きなお墓、誰のお墓なんやろな。

明子 卑弥呼や。

さぶ 卑弥呼てなんや。

明子 卑弥呼て、大昔の女の王さんなんや。

洪太 卑弥呼やったら、知ってる。図書室の本で読んだことがある。

邪馬台国の女王で、卑弥呼は神さんのお使いなんや。

さぶ 神さんのお使い？

洪太 そうや

さぶ それやったら、明ちゃんと同じやな。

洪太 そうや、たぶん、明ちゃんは卑弥呼や。

盆踊りの音頭が小さく聞こえて、やがて消えていく。

人のざわめき。しばぶくして、下駄の音。人の声。

「なんや、盆踊りはもう終わりや、花火なんかもうやめて、子供は帰らなあかんで」

明子 そのろうそく、お地藏さんのところから持ってきたのと違うの。

さぶ そうや、これお地藏さんのろうそくや。

明子 花火終わったら返しとかな、あかんな。

さぶ 大丈夫や。まだ仰山あったで。

明子 違う。お地藏さんのろうそくの火はひとつ火やて、そやから大事にせなあかんで、おばあちゃんが言うてたんや。

洪太 ひとつ火 てなんや。

明子 ひとつ火てな、お盆の時にこっちのほうへ来てた人が、あっちに帰りはる時に、迷わんように着けとく火のことや。大事な火やからほんとはお地藏さんの火を勝手に持ってきたりしたらあかんんで。勝手に持ってきたりしたら、その人らが迷てしめて、ちゃんと帰られへんようになつてしまつかもしれへん。

さぶ このハラツパ、戦争の時、たくさんの人が死にはったんやて。防空壕に逃げる途中で爆弾が落つてな。そやからろうそくも沢山ないとあかんと違うか。

洪太 そうや。俺も聞いたことある。

明子 洪ちゃんのお父さんも死にはったんか。

洪太 違う。

明子 ふーん、それやったら何で死にはったん。

洪太 よう、知らん。そやけど戦争とは違う。

明子 そうやな。洪ちゃんは戦後生まれやもんな。お父さんが戦没者なわけないわな。

洪太 明ちゃんは難しいこと知ってるんやな。

さぶ 明ちゃんは何でもよう知ってるて、お父さんが言うてたで。

明子 そやかて、うちは日陰もんやからな。日陰もんはしっかり勉強して他の人よか賢こならなあかんねん。そうせんと、生きていかれへんで、おばあちゃんが言うてたんや。

洪太 明ちゃん、日陰もんで何や。

明子 そんなん、あんたにはまだ難しいわ。

さぶ 明ちゃんのお母さんは、明ちゃんのお母さんは生きてはんのか。

明子 当たり前や、これ見てみ。この着物お母さんが縫うてくれたんやで。

さぶ それ、俺とこのお母さんが、昨日押入れから出してた着物やんか。

明子 違うわ。これはお母さんが縫うて、うちに持ってきてくれた

んや。お盆の時に着るようにて、お母さんがおばあちゃんに預け
といてくれたんやんか。あんたのお母さんなんか関係あらへん。
さぶ。

明子 洪ちゃん、あんた言つたやろ。

洪太 何おや。

明子 私が口紅してたこと、言つたやろ。

洪太 そんなこと、俺、言えへん。

明子 (激しく) みんなうちのことバカにしてるんや。日陰もんや
と思て、バカにしてるんや。うちはもうあんたらとは遊ばへん。
夏休みが終わつたらお母さんとこに帰るんや。そやからな、もう
あんたらとは遊ばへん。

明子が走り去るゲタの音。

せみの声。氷屋の音。はつたい粉売りの声。

洪太(N) それは、長い夏休みも終わりに近くなつたある日の夕
方だつた。

僕が一人で空き地に行くと、メケメケがやってきて、僕たちは二
人で野球を始めた。みんなは夏休みの宿題で忙しかつたのだ。
メケメケがボールを打つて僕がそのボールを受ける。メケメケは
女の子だが大きかつたので、メケメケの打つたボールは遠くまで
飛んでいって、僕は走り回つてボールを追いかける。飛ぶならな
かつた。そのうちに叢にボールが飛び込んでわからなくなり、僕
たちは二人でボールを探した。それは買ったばかりの僕の軟球だ
つた。

夕暮れが近くなつて、ボールを探すのにくたびれてきたころ、誰
かがメケメケを呼ぶ声が聞こえた。するとメケメケはスカート
ポケットからグリコのアーモンドチョコレート箱を取り出して
僕の手握らせると、「ごめんね」と言つた。それから「お母さ
んが迎えにきたから、私、もう帰る」といって、声のほうに走つ
ていって。

ぼくは驚いて、夕暮れの中に消えていくメケメケの後ろ姿をみて
いた。

やがて曲がり角のところまで行つたメケメケは、大きな体で振り
返つて何か白いものを力一杯、空に投げた。それは大きく弧を描
いた後、驚いて差し出した僕のグローブの中に入った。間違いな
く、さつきまで二人で探していたはずの僕の軟球だつた。

それからしばらくして長い夏休みが終わり、僕達はまた学校に通
い始めた。

けれども、もうメケメケは会うことはなかった。

少年探偵団の曲が流れてくる。

ぼん、ぼん、ぼくらは少年探偵団

勇気りんりん、空の果て

望みに燃える歌声は、朝焼け空にこだまする

ぼん、ぼん、ぼくらは少年探偵団

(終わり)